

パウル・ティリッヒ研究(I)

—「境界線(Boundary)」を手がかりとして—

森 田 美 千 代

I パウル・ティリッヒを研究する理由

- II 「境界線(Boundary)」 (i) 「境界線」を表わすいくつかのことは
(ii) 十二の「境界線」
(iii) 「境界線」をティリッヒはどのようにとらえているか。
- III 「境界線(Boundary)」は今日の教育にどのような示唆を与えてくれるか。

I パウル・ティリッヒを研究する理由

パウル・ティリッヒ(Paul Tillich 1886-1965)は神学者であり、狭い意味での教育学者ではないが、彼の発想・感じ方・考え方や生きざまや著作などにあらわれているものは、現代の教育に重要な示唆を与えてくれると思う。

さて、パウル・ティリッヒを研究する理由は、「境界線」に関してに限らず、次のような諸点が交錯しているといえる。

まず第一に、筆者は、パウル・ティリッヒの生きざまにおいても著作にあらわれた発想・考え方においても、動的(dynamic)でありまた規模(scale)が大きいということに非常な魅力を感じるのである。彼の生き方や考え方は、一時としてひとつところに静的にとどまったりあるいは自己完結したりあるいはおびえたりちこまったりしてはいない。彼の構想のダイナミックであることとスケールが大きいことに共感をおぼえるのである。

第二に、「境界線」と出会いは深く関わっているということから説明しな

なければならない⁽¹⁾。境界線上に立つためには、可能性 (possibilities) あるいは対照的な極が存在しなければならないし、かつ、その極が出会わないことには境界線上には立てない。従って、境界線上を問題にするということは出会いを問題にするということであるといえる。今日の子どもたちのおかれている現実をめを向けてみると、異質な発想・ものの考え方・生き方・世界といやおうなく触れ、出会わないことには真の意味において一日として生きぬいていくことができないのが現実であるといえないだろう。換言すれば、子どもたちは日々異質なものの間の境界線上に立たされているといえる。異質なものとのお会いおよび境界線は、今日の教育が正面から取り組まなければならない問題であるといえる。そういう意味において、ティリッヒの生と思索から生まれた十二の異質のものとの出会いおよびそれらの異質のものが出会う場の「境界線 (Boundary)」は、出会い——しかも、異質なものとのお会いとしての——の観点から教育を考える場合に重要な示唆が与えられると思う。

第三点は、上述の第二点と関わっているが、異質なものとのお会いおよびティリッヒのいう「境界線」(あるいは「境界線上 (On the Boundary)») は、人間が人間となっていくプロセスでいえば、ちょうど思春期あるいは青年前期において顕著な形で真正面から問題にせざるをえなくなってくるといえるし、また思春期になればそのことが問題にできるといえるだろう。(出会い・境界線が、人が人となっていく上で意味があるとすれば、それは乳幼児期・児童期においても問題にされなければならないことであるが、ここでは特にということである。) そういう意味において、ティリッヒの「境界線」から思春期あるいは青年前期の教育に対して何らかの示唆が与えられるのではないかと考えたからである。

第四に、キリスト教教育について、ティリッヒから学びたいと考えたからである。大ざっぱにいえば、キリスト教といえば宗教に属することであり、教育といえば文化に属することであると一応いえようが、宗教と文化は関係がないのであろうか。断絶しているのであろうか。もし何らかの意味において連続しているとすれば、宗教と文化はどのような関係で結びつきうるのか。「文化の実質は宗教であり、宗教の形態は文化である。」⁽²⁾「宗教は文化の実質であり、文化は宗教の表現である。」⁽³⁾というティリッヒから、キリスト教教育について考える視点を与えられたいと思う。

第五に、神学関係を除いて教育学関係においてティリッヒをとりあげておられるのは、福岡女学院短期大学の石井次郎氏と名古屋大学の田浦武雄氏であろうと思う。しかし「境界線」に焦点を当てた研究は我が国ではまだ皆無である。そういう意味において、この研究が教育界において何程かの寄与をなすことができるようにと願っている。

II 「境界線 (Boundary)」

(i) 「境界線」をあらわすいくつかのことば

「境界線」をあらわすことばとして、ティリッヒはいくつかのことばを用いている。その際、ティリッヒは、否定的消極的表現として「境界線」を限定定義するのは、the “between” ではない (A p.67) とか the dividing line ではない (A p. 73) とかという位で、ほとんどは肯定的積極的表現として「境界線」を限定定義している。例えば、border line (A p. 72), the human border-situation (A p. 64), border (A p. 30), the situation of border (A p. 49), a boundary of human activity which is no longer the dividing line between two possibilities, . . . (A p. 73), the boundary line⁽⁴⁾ など。いずれも同じように「境界線」という意味をあらわすことばであるといえる。従って、いずれのことばを使用してもいいのであるが、1936年に出版された *The Interpretation of History* の第一部にティリッヒ自から On the Boundary ということばをタイトルに使用しているので、この論文において、は、「境界線」は Boundary をもって統一することにする。

(ii) 十二の「境界線」

ティリッヒは、その生涯に、十二の「境界線」上に立たされたという。すなわち、①父の気質と母の気質 ②都市と田舎 ③上層階級と下層階級 ④現実と想像 ⑤理論と実践 ⑥他律と自律 ⑦神学と哲学 ⑧教会と社会 ⑨宗教と文化 ⑩ルター主義と社会主義 ⑪イデアリズムとマルキシズム ⑫本国と異国 である。

以下、順を追って、ティリッヒの十二の「境界線」をみていきたい。ただしティリッヒの十二の「境界線」を紹介するのがこの論文の目的ではないので、簡単にみていくことにする。

①父の気質と母の気質 ティリッヒは1886年8月20日にブランデンブルグ州のシュタルツェデルに生まれた。父は、東独のマルク出身の人で、

権威に対する感覚が強い人であった。母は、西独のラインランド出身の人で、具体的・合理的・民主的な人であったといえる。以上のような、父と母の両極の気質が、ティリッヒの内部に、絶えず緊張感を生み出すものとなり、その両極の気質を背負い込んでいるのが自分の気質であるとティリッヒは理解している。②都市と田舎 1900年、ティリッヒ 14歳の時、ベルリンに移り住むまで、彼はシェーンフリースおよびケーニヒスベルクの田舎に住んだ。いずれの町も、中世風で、周囲は城壁で囲まれ、そのことはティリッヒには「小さくて保護されたかつその町だけで独立している世界」(C p. 4)のように感じられた。あるいは、「窮屈かつ拘束された感じ」(C p. 6)ともいっている。このような中で、ベルリンへの何度かの旅行は、ティリッヒに「無限、開放性、制限を受けない空間」(C p. 6)あるいは「生のダイナミックな性質」(C p. 7)として映り、14歳の時にベルリンに移り住むことになった時もそのことを積極的に受け入れ、「私は非常な喜びを感じた。」(C p. 7)とさえいっているほどで、田舎の人によくありがちな都市に対する感傷的拒否をティリッヒはまぬがれている。③上層階級と下層階級 ティリッヒ自身は上層階級に属していたが、彼は下層階級の子どもたちとともに公立学校に通学した。そこで、彼は自分が上層階級に属していることに「社会的な罪責の意識」(A p. 9)をおぼえ、そのことが彼のその後の思索や生き方において絶えず彼をして階級間の「境界線」上に立たせることになるのである。④現実と想像 ティリッヒは、文学(特にシェイクスピアやリルケなど)や絵画(特に表現主義)を愛し、そのことにより、現実に埋没したりのめり込んだりして生きるのではなく、現実の世界とイマジネーションの世界の「境界線」に立って生きることができたといえる。⑤理論と実践 ティリッヒは最初自分の生涯の仕事となるのは理論追究であると考えていたようである。しかし、その後、大学時代のヴィンゴルフ、教会、野戦牧師としての活動を通じて、また宗教社会主義運動を通じて、現実から遊離した理論のための理論ではなく、実践にくい込む理論追究をするようになった。つまり、理論と実践・実践と理論の境界線上に立って思索し行動したといえる。理論と実践の関連は、大学改革にも及んでいる。第一次大戦後のドイツにおいては、学生数が増え、人間性を普遍的にヒューマニスティックに発達させる教育が完全に不可能になった。(A p. 21)そこでティリッヒは目的と方法が違う二つの大学の

学部を提案した。それらはお互いに関連しているけれども、一方は専門的職業教育を中心とするものであり、他方は哲学を中心とする人文学部である。このことがらの是非はドイツの教育史の中でいねいにみていかねばなんともいえないのであるが、筆者が知りたいのは、このことはティリッヒが大学の現実の状況にめをつぶることができなかつた故の提案であることをあらわしているといえないであろうかということである。⑥他律と自律 権威を重んじる牧師の父の影響で、ティリッヒは、自律 (autonomy) 的思考が創造力をもっているなどとはほとんど信じなかつた。(A p. 23) かといって、それではもう一方の極である他律 (heteronomy) を良しとしたのかということそうではない。(ティリッヒによれば、他律とは反自律的反ヒューマニスティックな感情を意味する。A p. 26) 他律と自律の境界線上に、つまりティリッヒのことばでいえば、神律 (theonomy) 的思考をとり続けたのであった。(彼によれば、神律とは「宗教で満たされた自律 A p. 24」あるいは「それは、存在の究極的意味が思考や行為のあらゆる有限的形式を通して輝くところの文化として定義されてきた。文化は透明で、文化が創造したものは、精神的内容の容器である。B p. xvi」といっている。) ⑦神学と哲学 ティリッヒはギムナジウム存学中から哲学者になろうと思っていた。シュベグラー、フィヒテ、カント、シェリングなどを読み、特にシェリングはティリッヒの哲学博士と神学修士の研究対象となった人である。それらの論文を執筆中ティリッヒは神学生であり、その後の生涯はその経歴(所属と研究題目)をみてもわかるように絶えず神学と哲学の境界線上にいたといえる。ティリッヒはいつている。「哲学と神学は別々のものではない。しかもそれらは同一のものではない。しかし、それらは相互に関係があるものである。(後略)」と。(B p. xxvi) ⑧教会と社会 教会は何といってもティリッヒにとってホームであった。教会の中で生まれ、教会の中で成長したといってもよい。しかし教会外の社会特にインテリゲンチャーやプロレタリアートの人々との接触を通して、ティリッヒは教会外の社会にも組織化された教会と同じようにいやそれ以上に真なる教会と呼んでしかるべき群がいることを発見し、それらをティリッヒは潜在的教会 (latent church) と名付けている程である。つまり、ティリッヒは生粋の教会人であるにもかかわらず、教会と社会の境界上にあえて自分を位置せしめることによって自分のよってたっている場を確認しつつ、教会の中

に安住することを絶えずいましめ続けたといえよう。⑨宗教と文化 「ラヴェンナのモザイクやヴァチカンの法王の礼拝堂の天井画や老レンブラントの肖像画に感動した人が、この人達の経験は宗教的であるかあるいは文化的であるかと問われるならば、その人は答えに窮するであろう。恐らく、次のようにいうのが正しいであろう。彼の経験は形式に関していえば文化的であるが、内実に関していえば宗教的であると。」(A p. 49)あるいは、既に引用したが「文化の実質は宗教であるように、宗教の形態は文化である。」(A p. 50)「文化の最も高い次元は、人間の存在がその有限性とそして神の探求において、(しかも完全な自律的形態において、)理解される所で、獲得される。また逆に、最も高い形態の宗教はその中に自律的形態を内包しなければならない。(後略)」(A p. 50)宗教と文化においても、ティリッヒは宗教は宗教であり文化は文化であるとして事足りりとするのではなくて、宗教をして真の宗教たらしめるためにはそれが文化の営みに受肉していなければならないし、文化をして真の文化たらしめるためにはそれが何程か宗教的でなければならないという考え方に基づいてまさに思索し生きたといえよう。⑩ルター主義と社会主義 ⑧の項目で教会と社会との境界線を述べたが、それをさらに具体的にいったものがルター主義と社会主義との境界線ということになる。その境界線とは、ティリッヒにおいては宗教的社会主義のことであるが。⑪イデアリズムとマルキシズム ティリッヒは、ドイツのイデアリズム(特にカント)を若い頃学び、後になっても「もしもイデアリズムが真理の原則として思考と存在を一致させようと主張することを意味するとしたら自分はイデアリストであるといっている。」(A p. 60)しかし、イデアリズムが思考の体系と存在の体系は一致するという時、彼は自分はイデアリストではないという。ただシェリングのみが次のことに気付いていた。すなわち「リアリティは本質の表われであるばかりでなく、リアリティは本質に矛盾するものでもある。さらに、人間の実存は人間の本質に矛盾するのを表わしている。(後略)」と。(A p. 61)しかしシェリングは以上のような考え方を徹底的におし進めることをせず、結局はキルケゴールを待たねばならなかったのであるが。しかしキルケゴールにおいても、本質とその矛盾としての実存をあくまで個人の問題としてしかとらええなかった。ここにティリッヒは、人間の存在を決定するのは社会的矛盾(社会階級)であるとするマルキシズムを肯定し、

(ただし、マルキシズムが人間の存在を決定するのは社会階級のみであるといいきる時に、ティリッヒはマルキシズムを否定する。) イデアリズムとマルキシズムの境界線上に立つのである。⑩本国と異国 1933年ティリッヒ47歳の時、彼は故国ドイツからアメリカに移住した。言語(「英語の精神は、古典的で哲学的なドイツ語の神秘的なあいまいさでおおわれている私の思考の多くのあいまいさを明確にするように要求した。」 B p. x)・生活様式・風土など全く違う二つの世界に生きたティリッヒはまさに一生を二回生きたといえよう。ところが彼は本国と異国の問題は今述べたようなたんに外的な移住(outer emigration)が問題なのではなく内的移住(inner emigration)が人間の中でおこるかどうかの方がより重要であることを述べている。つまり、「「ホーム」のほんとうの意味は、個人の状況によってさまざまである。それは、土地とか国家とかいうような意味でのホームかもしれない。そうだとすると、要求は「外的な移住」であるかもしれない。しかし、これはまれな場合である。もっと頻繁には、ホームを去ることは、支配的な権力や社会的・政治的傾向から離れる要求を意味し、そして、それらを積極的・消極的抵抗に明け渡すことを意味する。換言すれば「内的な移住」を意味する。(中略) 異国への方法もまた、純粹に内的な何かを意味するかもしれない。すなわち、信じることや思考の習慣的な方法から別れ、当然なこととしがちな全ての境界線をまたぎ、そして根底的に問いかつ新しい未知なるものへと向かって行く(中略)ことを意味するかもしれない。その場合には、異国は地理的に違った国ということではなくて、時間的に将来の国すなわち「現在を越えるもの」ということである。」(A p. 68)

以上、簡単にティリッヒが立たされたという十二の境界線について述べてきたが、以下において、ティリッヒ自身、境界線なるものをどのようなものとしてとらえているか、ティリッヒ自身が表わしていることばを拾い上げて説明することにしよう。

(iii)「境界線」をティリッヒはどのようにとらえているか。

まず第一に、ティリッヒは異質な二極間のあるいは異質な二つの可能性の間の「境界線」を、ダイナミックであること(the dynamic, A p. 7), 葛藤(conflict, A p. 4 p. 19), 格闘(wrestling, A p. 5), 戦い(struggle, A p. 5), 緊張(tension, A p. 4), 攻撃(the aggression A p. 7), 動揺(-

agitating A p. 8), 戦場 (battleground A p. 4) などとしてとらえている。つまり、二極間あるいは二つの可能性がまさにあざやかにコントラストをなしているが故に、その「境界線」上に立たされるティリッヒは、絶えず、力動感を感じ、拮抗し、格闘し、緊張感を感じることになり、まさに「境界線」上はティリッヒにとって激しい戦いの場になるのである。「境界線」は、平静さとか調和からはおよそ遠く（「調和のどの体系も真理ではない。」A p. 63）、生命が躍動しつつ格闘・拮抗・緊張感がみなぎったギラギラしたまさに「生きている」という感じがする場ではないか。

第二に、上述の第一点と少し角度を変えてみれば、ティリッヒにとって「境界線」は、深い割れ目 (chasm, A p. 35)、裂け目 (the split, B p. xvii)、隔たり (the gap, B p. xvii)、私たちの実存の深淵の経験 (experience of the abyss of our existence, A p. 35)、忘我の質 (the ecstatic quality, A p. 7)、実存の忘我の形式 (the ecstatic form of existence, A p. 37)、生の当惑 (embarrassment of life, A p. 62)、危険な場所 (the danger point, A p. 14)、リアリティ (reality, A p. 61)、人間の本質に矛盾する (contradiction of the human essence, A p. 61)、実存的 (existential, A p. 15)、私の実存 (my existence, A p. 30) などとしてとらえられている。つまり、「境界線」は人間の本質から離脱し人間の本質に矛盾するところの実存があざやかに表われる場であるといえよう。「境界線」はティリッヒの実存の場だったのだ。「境界線」上に立つということは実存的になるということであるのだ。実存的にならざるをえないのである。

第三に、「境界線」をティリッヒは「境界線は決定的な議論を要求する (A p. 56)、あるいは決断がなされなければならないものとしてとらえている。異質な二極間のあるいは異質な二つの可能性の間の「境界線」が対象化する認識の段階にとどまっているかぎり「境界線」は決定的な議論や決断を要求するものにならないが、「境界線」が生き方に関わってくる時に対象を鑑賞したりあるいは興味関心を示すことではすまされなくなり徹底的な根底的な議論や主体の決断・選びが要求されるのである。ティリッヒは以上のことを『文化の神学』では次のように述べている。すなわち、「美的態度だけでは——キルケゴールの心理でいえば超然とする態度であるが——、「本質」すなわち可能性の範囲に関わることができるだけである。単なる認識を含む美的態度においては、常に多くの可能性があり、そして美

的態度においては「決断」は要求されない。倫理的態度において自分だけの決断が常になされるにちがいない。」⁽⁵⁾

第四に、(これは第一点と関わっているといえるが、) ティリッヒが「境界線」を対照と相関の方法 (way of contrast and correlation, A p. 72), 相関の方法 (method of correlation, B p. xxvi), 統一 (unity, A p. 29), 統合 (the synthesis, A p. 59), 統合の方法 (the way of syntesis, A p. 10), などとっていることから推測できるように、異質な二極間あるいは異質な二可能性間が葛藤 (conflict) や緊張 (tension) などつまりコントラストをなしていればいる程、「境界線」上に立たされている者は二極間を二可能性間を結合あるいは統合しようとするということである。弁証しよう (dialectical) とするということである。つまり、二極間をあるいは二可能性間を分離させておくことはすなわち人間として分裂して生きていくことになるから、まとまりある人間として生きていくためにはどうしても二極間をあるいは二可能性間をなんとかして結合させ統合させようとする心理が働くことになるのであろう。(ティリッヒは balance (C p. 9) という語も使っている。balance とか method (way) of correlation はやや平穏な言い方で、contrast とか way of synthesis というのは鋭角的にいったものといふことができよう。)

以上、ティリッヒが「境界線」なるものをどのようなものとしてとらえているか、彼自身が表わしていることばを拾い上げながらみてきたが、ティリッヒは、要約すれば、「境界線」は第一にダイナミックで葛藤や緊張の場でありそういう性質をもっているといえること、第二にそれはきわめて実存的な場であり実存的な性格を備えていること、第三にそれは決断や選を要求するものとしてせまってくるものであること、第四に「境界線」はそこに立たされている人に二極間をあるいは二可能性間をなんとか結合・統合しようとする心理をおこさせるものであるととらえられているといえるだろう。

1936年に出版された *The Interpretation of History* の第一部 *On the Bounday* の結びに、ティリッヒ自から次のように書いている。「多くの境界線上に立つことは、さまざまの形で、実存の不安 (the unrest) 不安定 (insecurity) 内的限界 (inner limitation) を経験することを意味し、また、平静 (serenity) や安心感 (security) や完全 (perfection) に到達することので

きないのを知ることの意味する。」(A p. 72) と。あるいは、「私たちの存在の中核そのものでさえ、それは境界線にすぎない。」(A p. 73) と。

Ⅲ 「境界線 (Boundary)」は今日の教育にどのような示唆を与えてくれるか。

ティリッヒがその生涯において立たされたという十二の「境界線」を簡単にみたが、現代の教育においては十二の「境界線」に加えてさらにいくつかの「境界線」が考えられよう。なぜならば、ティリッヒが十九世紀と二十世紀の境界線上で生まれ育つたように(思春期まで)(C p. 3)、現代の子どもたちはまさに二十世紀と二十一世紀の境界線上に生まれ育つのだ。しかも、二十世紀と二十一世紀の境界線上は、十九世紀と二十世紀の境界線上よりももっと複雑で困難なそれであろうと考えられるからである。二十世紀と二十一世紀に生きる子どもたちに何を学ばせどいう選択をさせるのか。非常に重要であるといえよう。追加すべき第一点は、次のようにいえるであろう。ティリッヒ自身死の数年前すなわち1960年5月から7月にかけて知的交流日本委員会の招きにより日本を訪問したが(彼がもう少し生きていたならば、東西の「境界線」上に立つて思索し発言したであろうと思われる。)、現在の子どもたちは、東西の「境界線」に立たないことには真の意味において一日として生きぬいていくことができないのではなからうか。東洋的な物の考え方・西洋的な物の考え方の接点で思索し行為し生き続けることができるような人間が育っていくためには、東西の「境界線」はぜひともつけ加えられねばなるまい。第二に、ティリッヒは、自分はヨーロッパ人であるから宗教と科学の関係よりも宗教とヒューマンズムの関係が問題になるといっているが、まさにその通りに彼は宗教と科学の関係はあまり問題にしていない。(C p. 9)しかし、現代の子どもたちは科学の発達と無関係な存在でありえないどころか、悪い意味での科学の発達に洗脳されているといってもいいすぎではあるまい。従って、科学的なるものを再検討する意味において、宗教と科学の「境界線」上に子どもたちを立たせることが必要ではあるまいか。他にも、ティリッヒの十二の「境界線」につけ加えられるべきものがあると思うが、以上二つの「境界線」すなわち東西の「境界線」、宗教と科学の「境界線」がつけ加えられるほうが現代においてはよりいいといえるのではないかというこ

とを最初に明らかにしておきたい。

さて、ティリッヒの「境界線」から、今日教育に関わる私どもの学ぶべきものは何であろうか。それは次のようにいえないであろうか。現代はどちらか一方の極やどちらかの可能性の中に無知に安住したりあるいはそれを固執して一日として真の意味において生き延びていくことはできない。従って、まず第一に、生徒に、この世には異質なものの異質なものの考え方・異質な世界（観）・異質な生き方があることを、教師が提示しわからせる。つまり生徒に自分とは異質なものに出会わせるということである。第二に、その際に、つまり提示しわからせる際に換言すれば出会わせる際に、次の二つのことが注意されねばならない。①異質なものととの出会いが観念的にならないために（自分とはおよそかけ離れたことであると考えないために）生徒にとってリアリティ感がある場（場合、条件など）を設定しその「境界線上」に立たせるということと、②異質なものととの出会いが生徒の中で平面的なものにならないで立体的なものになるようにするということである。異質なものととの出会いが平面的になるとか立体的になるとかということをごここで説明しておかねばなるまい。異質なものととの出会いが平面的になるとは、水の流れのようにA地点からB地点へ自然に流れ込むとか、現代のマスコミのように人間（生徒）の中に葛藤や緊張を起こさずに洗脳するかのように流れ込むとか（葛藤や緊張を起こさずにそれまで知らなかった世界を知り得る。）、あるいはティリッヒ自身言っていることであるが、分割線（dividing line）によってAとBが分けられてAとBの間に何らの関係もなくなるということの意味するといつてよい。それに対して、異質なものととの出会いが立体的になるとは、生徒の中で葛藤や緊張やいい意味での混乱が起きるといえることを意味するといつてよい。第二を換言していうならば、生徒の中に異質なものととの出会いが立体的になるようなそういう場を設定するといつてもよいであろう。第三に、葛藤や緊張を経過した後、異質な二極や異質な可能性を深い高い次元で統合させ、「境界線」上で決断し選ばせ、次の段階に一步踏み込ませるといふことである。葛藤や緊張を経遇しないのは異質なものととの平面的出会いといったが、葛藤や緊張を経遇しても二極間があるいは二可能性間が統合されなければそれは分裂された・引き裂かれた人間でしかない。ティリッヒがきわどいところで分裂された・引き裂かれた自分をまぬがれてまとま

りある統合された人間として生きぬいたように、葛藤や緊張や格闘をくりぬけて統合された人間あるいは決断し選びとることのできる人間として生きぬく人間を育てることが現代においては要請されているのではなからうか。

しかも、以上述べた三つのプロセスを思索（認識・思考）においても生き方においてもたえずくりかえさせるのがいいだろう。

以上は、昭和 52 年の第 20 回教育哲学会全国大会で口頭発表した原稿に、加筆したものである。

(注)

- (1) ティリッヒ自身は出会いということばを使っているわけではない。しかし、筆者はティリッヒの「境界線」を問題にするということは出会いを問題にするということであるといえると思う。その理由は以下の通りである。ボルノーの『実存哲学と教育学』（峰島旭雄訳、理想社、昭和 41 年、第五章出会い）では、何人かの学者の出会い論があげられている。すなわち、人と人との出会い、人と状況との出会い、人と芸術作品や自然との出会い、人と思想との出会い、人と神との出会いなどである。従って、出会いを以上のように広い意味に解すると、ティリッヒの「境界線」も出会いといいかえてもよいと思う。
- (2) Paul Tillich, *The Interpretation of History*, P. 50
この論文において以後この著作を引用する場合は、A であらわすことにする。
- (3) Paul Tillich, *The Protestant Era*, P. xvii
この論文において以後この著作を引用する場合は、B であらわすことにする。
- (4) Paul Tillich, "Autobiographical Reflections" in *The Theology of Tillich*, P. 14
この論文において以後ティリッヒのこの論文を引用する場合は、C であらわすことにする。
- (5) Paul Tillich, *Theology of culture*, P. 85